

学会レポート

第 34 回全国語学教育学会(JALT)全国大会が 2008 年 10 月 31 日から 11 月 3 日まで、東京の国立オリンピック記念青少年センターで開催された。今学会は **Pan Asian Consortium (PAC7)** と合同で行われた。テーマは *Shared Identities: Our Interweaving Threads* だった。

下記はほんのわずかだが、今学会で行われた語用論の発表の抜粋である。

石原 紀子 法政大学

Teacher-Based Assessment for Foreign Language Pragmatics [外国語語用論の教師中心の評価]

ishi0029@umn.edu

石原氏は大学 EFL クラスで行った、談話における要求の語用を明示的教授した結果についてのケーススタディを報告した。コースの 2 週目に学生が教授に論文の提出日の延期をお願いするロールプレイのための会話を学習者に書かせた。この課題は 6 ヶ月後に書かれる同じ筋書きの新たなロールプレイの比較基準として用いられた。石原氏はどのように評価やフィードバックが教師によって与えられたかを適切な要求の仕方の認識について学習者の初期の内省についてとケーススタディの 6 週間の間はこの認識がどう発展したかを論じた。

Jill Murray Macquarie University, Australia

Teaching Pragmatics for Test Preparation [試験準備のための語用論教授]

Jill.Murray@ling.mq.edu.au

Murray 氏はオーストラリア政府の教育局のオーストラリアにいる海外の訓練の済んだ英語教師のための The Professional English Assessment for Teachers[教師のための専門英語試験] (PEAT)の準備を目的としたプログラムの設計者の一人である。このような教師たちへの語用論の明示的な教育について報告した。PEAT 試験の仕様は発話行為、発話事象、丁寧さ、語用移転などその他にも多くの理論領域を扱うコース内容を規定した。Murray 氏は指導周期を説明し、指導教材（シナリオやシュミレーション）の例をあげ、プログラムを評価した。語用論的言語能力の指導についてのいくつかの問題を提示し、発表を締めくくった。

- 標準型への社会性の種類や発話コミュニティの習慣
- 国際言語としての英語の興隆における母語話者のような語用論的言語能力の妥当性

深澤 清治 広島大学

Pragmatic Needs Analysis of Japanese EFL Learners in Study Abroad Contexts[留学における日本人 EFL 学習者の語用論ニーズ分析]

深澤氏は日本人 EFL 学習者の英国留学経験における語用論のニーズを明らかにする研究を報告した。今研究の更なる目的は語用の気づきのケースの検証と留学前後プログラムの展開のための基礎データの獲得だった。もっともやる気を必要とするコミュニケーションの状況は教室の状況や仲間との社会的行動に比べて、ホームステイのホストファミリーとの状況（53%）であることがわかった。最も困難な発話行動の状況は日本文化の説明であった。2 番目に難しかったのは、要求で、3 番目は苦情だった。

Tim Greer 神戸大学

Observing talk: How to hold a CA data session[話しの観察：会話分析の仕方]

tim@kobe-u.ac.jp

ワークショップでまず Greer 氏は自然に行われている話しからどのように会話分析のデータを準備していくかを説明した。重要な概念である、隣接ペア、行動連鎖、三番目の転換について論じた。そして、ミニ会話分析データ解析のセッションへと参加者を導いた。データは日本人英語話者の口頭能力試験を用いた。データを分析する際、「なぜ、今これか。」という、根本の問題を頭に置くように、ワークショップの参加者は指示された。この問題の妥当性を理解するには

- 「これ」は精査の対象物（代名詞、イントネーションのパターン、質問）の名付けを意味する。例えば、精査の対象物は話者 X に「からかい」と名称を付けられる。
- 「今」は会話の展開の中のある点、箇所、位置を意味する。会話のやりとりの展開にどこか特定の点で、出現している発言の重要性は何か。
- 「なぜ」は『どうやって会話の断片は機能しているのか』に関係している。話者の意図を思索する代わりに、特定の発言は何をしているのか、やり取りの中で他の会話参加者にどのように受け止められ返答されるのかを考える。

Sybil Armstrong 関西外語大学

Desperate Housewives in an EFL Classroom[デスパレートな妻たちを外国語としての英語クラスで]

sarmstro@kansaigaidai.ac.jp

Armstrong 氏は社会相互作用における語用論指導と学習のための媒体として、日本の大学の教室で人気のアメリカのテレビ番組デスパレートな妻たちをどのように用いたか論じた。第 1 テレビシリーズの番組台本の特定の要素が続けられていくかの 11 話の学生用のプリントがどのように作られたかを説明した。学生をよりアクティビティに取り込み、会話のやり取りの語用論的要素に気づく学生の能力をより伸ばせるであろうもっとタスク中心のアクティビティを造るというコースの改定を提案して彼女は発表を終えた。